

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 319 回 福沢諭吉(?)「心訓」

2009.7.5

- 一．世の中で一番楽しく立派なことは一生涯を貫く仕事を持つと云う事です
- 一．世の中で一番みじめな事は人間として教養のない事です
- 一．世の中で一番さびしい事はする仕事のない事です
- 一．世の中で一番みにくい事は他人の生活をうらやむ事です
- 一．世の中で一番尊い事は人の為に奉仕して決して恩にきせない事です
- 一．世の中で一番美しいことはすべてのものに愛情をもつ事です
- 一．世の中で一番悲しい事はうそをつく事です

私の小さな書齋には、この、福沢諭吉の「心訓」が立派な額に入り掲げられている。何か迷った時は、いつも声を出してこの「心訓」を読んでいる。

生涯を貫く仕事をもてない人、する仕事がない人が、最近いかに多いか。フリーターとか、派遣切りとか、年金不払いとか社会問題化しているが、元は自分自身の問題であったはず。仕事とは生きることの糧であると同時に、社会的責任を全うすることである。その意識があれば仕事とは、与えられるものではなく、自分で勝ち取る、あるいは作り出すものであろう。昔はみんな貧しかったが、その「職」に対して誇りがあった。だから生涯を貫く自信が持てた。そんな日本人の勤勉さを雇用システムに反映したのが、安心して責任を全うできる終身雇用制だったに違いない。開業率が閉業率を大きく上回った起業の意欲も、かつての話となって久しい。

教養のない輩が多くなったのは亡国の前兆か？その最たるものが大企業の経済人や政治家、正に我国をリードすべき人達が私利私欲に走っている。それに面白がって煽り立てるマスコミ人。報道人としてのジャーナリズムの誇りを投げ出し、ゴシップと儲け主義に没頭するマスコミの downside には耐えられない。こいつらが日本の伝統と文化をぶち壊そうとしている。自らの義務と責任を果たさず、自身の理念すら持てない連中が起こす言動が、日本の常識になった時、必ず我国は崩壊する。それを望み、歓喜するのは一体誰なのか！無教養国家の末路である。

人がどんな洋服を着ようが、どんな車に乗ろうが、ヨーロッパ旅行へ行こうが、どうでもいい。不思議とそんなことばかり良く知っているおばさん(もちろん、おじさんでも良い)がいたりするが、滑稽の極みである。幸せの価値観は自分自身、人との比較ではない。幸せの尺度は心、金品・物では決してない。人をうらやむ心は、たとえ億万長者になったとしても、満たされるものではない。幸せの尺度を間違えると、一生、死ぬまで不幸から逃げられない。醜く、そして寂しいことである。

見返りを期待して奉仕する...実はそんな日本語はなかった。奉仕とは本来一方的であり、パートナーとか、恩を売るとかとは無縁のものである。その基本は「善意」であり「誠意」であり、それを具現化する一種の自己実現であると思う。決して見返りを求めるものではない。

最後に「嘘」をつくことは「世の中で一番悲しいこと」だと、自ら記したのは、皮肉といえば皮肉である。というのは、残念ながらこの「心訓」は福沢諭吉の言葉ではない。どこかの智恵者が勝手に、それもどうやら、戦後になってしばらくしてから作り上げたようだ。それをさも福沢諭吉の発言であるかのように、「福沢諭吉：心訓」などともったいらしく銘打ったにすぎない。つまり、真赤な偽作である。さすが福沢諭吉...騙され続けはや25年、今日も書齋に掲げられている。いやはや、我人生の羅針盤と掲げていた「心訓」も、とんだ「落ち」がついてしまった。